

## 〔学会企画シンポジウム参考資料1〕

### カリ アラン ヌ グルバン Kari Alang Nu Gluban (清流部落簡史)<sup>1</sup>

ダックス・パワン (Dakis Pawan, 郭明正)

(下村作次郎訳)

#### 〔凡例〕

- ・本稿は、簡鴻模、依婉・貝林、郭明正合著『清流部落生命史』（永望文化事業、2002年1月）に収録された、Dakis Pawan（郭明正）「Kari Alang Nu Gluban（清流部落簡史）」の翻訳である。
- ・原文にはもともと注はない。訳者は、訳文を著者に目を通していただき、不明な点をご教示いただいた。本稿の文末注は、この過程で著者から寄せられたコメントである。
- ・本稿では、セデック語は鄧相揚著・魚住悦子訳『抗日霧社事件をめぐる人々』（参考文献参照）に出ているカタカナ表記を使用した。但し、従来歴史的に（あるいは慣用的に）使用されてきたこれらのカタカナ表記は、必ずしもセデック語の音を精確に表記しているわけではない。今回、著者は、訳者の求めに応じてセデック語を台湾留学中の研究生の協力のもとにカタカナで表記してくださった。著者によって示されたこれらの表記はすべて文末注に掲げた。なお、前掲書に出ていないセデック語は、著者より示された表記を使用したこととお断りする。

はじめに説明しておきたいのは、本文の内容は、限られた日本統治時代の資料といささか筆者が見聞したもの以外は、すべてわが清流の長老たちの口述記録を集め整理したものであるということである。人の記憶力は、結局のところ限度があるが、ただし、代々伝えられている口述歴史は、わが民族〔原文「族群」〕にとって、大変に貴重で、一定の参考価値がある。

次に、筆者は、セデック・タックダヤ (Seediq Tkdaya)<sup>2</sup>（訳注1）の観点から、わがタイヤル族内の系統族群について卑見を述べたいと思う。タイヤル族は、タイヤル亜族 (Tayal/Tayan) とセデック亜族 (sejiq / sediq / seediq) の二大系統からなっているが、ただ台湾光復以来、政府の関係機関は、二大亜族をタイヤル族と総称したために、一般の国民は、セデック亜族についてはよく知らないのである。もし現在タイヤル社会に通用している方言の親疎関係から区分するならば、わがタイヤル族の二大亜族にはまた、それぞれ系統族群がある。例えば、セデック亜族は、トロック (Truku)<sup>3</sup>、タウツァ (Toda)<sup>4</sup>、およびタックダヤ (Tkdaya) の三つの系統に分けることができる。タイヤル亜族はまた、クナハクン (Qnahaqun)<sup>5</sup>、ムブガラ (Mbgala)<sup>6</sup>、プルナワン (Plnawan)<sup>7</sup> の三つの系統に分けることができる。言い換えれば、わがタイヤル族は、今日までの発展の中で、少なくとも六つの系統に分けることができ、現在清流部落に住む人々は、タックダヤの系統で、セデック亜族の一系統に属する。実際のところは、わが先祖たちは、方言の差異を族内の各系統の識別名称としたのではなく、民族の発展、拡散の後に分布した区域を各系統の識別名称としたが、筆者は、読者にわかりやすいように、現在使われている方言で区分した。以上、筆者が使用する系統名称は、わがタックダヤの人々が使い慣れた呼称であり、他の系統の人々が使い慣れた呼称といささか差異があるかもしれないし、あるい

は完全に異なっているかもしれない。各系統間の相互の呼称（他称）で用いられている言葉の意味もまたそれぞれ異なっているが、年代が遠く離れ、このような相互の呼称の本来の言葉の意味は、もうかなり考証が難しい。注意を要するのは、このような識別用語は、その区域に居住する人々を指し、その人々の族群名称ではないということである。

わがタックダヤの先祖たちは、もともとは、いまの霧社の一帯に住んでおり、日本統治時代以前には、すでにいまの眉溪、霧社、春陽、蘆山などの一帯に分散して居住していた。タウツァ人（seediq Toda）とトロック人（seediq Turuku）は、私たちをタックダヤ人（seediq Tkdaya）と称するが、意味はさらに上方、さらに深山に住む人々という意味である。中央山脈の白石山のポソコフニ（Pusu-Qhuni）<sup>8</sup>は、わがタックダヤ人の発祥地であり、その地をわが祖先はブヌフン（Bnuhun）<sup>9</sup>と称し、私たちの祖先はポソコフニの岩穴の中で誕生したと伝えられている。

“ポソコフニ”とは、わが民族語の言葉の意味は、“木の根部、根元”で、地面に出た部分（根部）を指し、地面に埋まった部分を指さない。実際は、ポソコフニは、山の背に突っ立った巨大な岩石であって、神木ではない。それは、高さ約80~100メートル、最大直径約40~50メートルで、いま「牡丹岩」と称されている。本族の神話伝説では、わがタックダヤの祖先は、ポソコフニから生まれ、わが族の人々は、ポソコフニの子孫であるとあり、このような神話伝説は、トロック人やタウツァ人が伝える伝承にも広く流布している。ちょうど、タイヤル亜族の人々の神話伝説でも、その祖先はピンスブカン（Pin-sbkan）より生まれたと言われており、ピンスブカンも巨石で、その巨石はいまなお発祥村瑞岩部落付近の台地に立っている。ここには、私たちタイヤル族（タイヤル亜族とセデック亜族）と巨石との深い淵源があらわれているようだ。

わがタックダヤの長老たちは、先祖の移動状況について話すときはいつも、ほとんど誰もがタロワン部落（alang Truwan）<sup>10</sup>を基準点として、族人のその後の発展と移動について語る。ここで留意しなければならないのは、セデック亜族の三つの系統は、みなそれぞれタロワンと称する部落を擁していることである。タウツァ人が指すのは、ブヌゲブン部落（alang Bngbung）の部落跡で、いまの平静部落の上方に当たるなだらかな斜面地である。タックダヤのタロワン部落は、いまの春陽温泉付近の台地となだらかな斜面地を指し、1930年に霧社抗日事件が起こった時にはなお8戸の家があった。トロック人が指すのは、いまの合作村の平生部落であり、今日もなおタロワン部落（alang Truwan）と称し、目下唯一存在するタロワン部落である。筆者が以下に述べるタロワン部落は、わがタックダヤ人に属するタロワン部落である。つまり先述したいまの春陽温泉一帯がその部落の存在した跡である。タロワンと称される部落が三ヶ所あることから、区別する上で、トロックとタウツァの系統の人々は、タックダヤ人のタロワン部落という意味で、タロワン・タックダヤ（Truwan Tkdaya）と呼び習わしている。

わがタックダヤ人の口伝史では、タロワン部落は先祖たちが長期にわたって共に住んだ古い集

落である。タロワン部落の人口が、自然繁栄で年々増加し、タロワンの中心部に、住んだり耕作したりする十分な空間を祖先に提供できなくなると、族人たちは次第にタロワンの古い集落から外に向って移動し、新しい領域を開拓していった。タロワンの古い集落には、タロワンの主力部落のほかに、ルク部落 (alang Ruku)、ルク・ダヤ部落 (alang Ruku-daya)、シーパオ部落 (alang Sipo)<sup>11</sup>、クヌゴホ部落 (alang Knugoh) およびシキクン部落 (alang Sikikun) などがあり、タロワン溪兩岸の台地やなだらかな斜面地や山腹に分布していた。その主力部落跡は、いまの春陽温泉の対岸の平坦地で、当時の建物は、地形にそってほぼ三層に建てられていた。移動したもう一つの原因として、族内に伝わっているのは、水源地の流毒事件で、族人は、「wada saun pcahu<sup>12</sup> seediq ka pusa qsiya mmahan alang Truwan」と言っている。意味は、「ある人がタロワン部落の飲用水の水源地に毒を流した」である。その事件の内容は、簡単に述べると次の通りである。「よそ者がタロワン部落に来て、毛皮、手工芸品、特産物などの商売を行った。これらのよそ者の商人は不定期にわが部落に来て物々交換の交易を行い、いつも三、四人でやってきた。数年の交易の往来の後、彼らはわが部落の族人の親しい友人となった。ある日、交易にやってきた商人の中に、わが部落の婦人に対して本族のガヤ (Gaya) に逸脱する行為を行なう者がいて、わが族人によって首を狩られて処刑された。わがガヤを犯していないよそ者の商人は、心に恐れを抱いたが、それでも引き続きタロワン部落に来て商売をしたいとわが族人に訴えた。生来純朴な族人は疑うことなく許可した。よそ者の商人が、悪巧みをして、報復の気持ちを抱き、一心に仲間の仇打ちを企てようとは知る由もなかった。かくてわが族人との交易の機会を利用して、計画的にわが飲用水の水源地に金属鉄器 (hiluy, ヒルイ) を沈め、金属鉄器を水中で酸化させ、生じた錆で水質を汚染させ、わが族人が知らず知らずのうちに金属イオンを含む水を飲んで毒にあたるように仕組んだのである。しばらくすると、部落で治療のしようがない奇妙な病気 (mnarux naqah, ムナルフ ナカハ) に罹って死んでいく者がいることにはじめて気がついた。その後、この奇妙な病気に罹る族人がますます多くなり、巫師たち (Seediq msapoh, ムサポホ) もこの病気に対して打つ手がなかった。族人は、恐怖の余り、先を争うようにして一家を上げてタロワンの集落から移動していった。」

わが先祖がタロワンの旧集落より相次いで移動してから、1903年に日本人がわがタックダヤ人を征服するまでに、わが族人は、いまの精英村蘆山部落から西のいまの南豊村眉溪部落のあいだに大小合わせて30余りの部落を建てていた。日本人が霧社の地を占領して後、山間部に居住するタックダヤ人を効果的に長く統治するために、わが30余りの部落を12社に区分けした。いまの眉溪より霧社、蘆山の方向に順次、1、トーガン部落 (alang Tongan)<sup>13</sup>、2、シーパウ部落 (alang Sipo)、3、パーラン部落 (alang Paran)<sup>14</sup>、4、ロードフ部落 (alang Drodux)<sup>15</sup>、5、ホーゴ部落 (alang Gungu)<sup>16</sup>、6、スーク部落 (alang Suku)<sup>17</sup>、7、タロワン部落 (alang Truwan)、8、マヘボ部落 (alang Mebebu)<sup>18</sup>、9、ボアルン部落 (alang Boarung)、10、ブカサン部落 (alang Bkasan) とし、そして東南の方向にいまの霧社の通りと碧湖を隔てた対岸には、11、カッツク部落 (alang Qacoq)<sup>19</sup>と、12、タカナン部落 (alang Takanan) が置かれた。1930年10月27日に、

族人はついに日本人の威圧的な統治と酷使に堪え切れず、国際社会を震撼させた「霧社抗日事件」を起こした。抗日に失敗した後、日本人は抗日に参加した主要な6部落の生存者を今日の清流部落に強制移住させた。そのため、清流部落の建設には特殊な歴史と政治的背景があり、いま清流部落に住む族人は霧社の抗日6部落の遺族の後裔から構成されていることが理解できよう。以下、霧社蜂起に参加した主要な6部落について略述する。(訳注2)

### 一、ホーゴ部落 (alang Gungu)

ホーゴ部落は、いまの春陽部落であり、四つの子部落からなっている。いま公道が通る所から蘆山の方向へ向うとすれば、順番に1、クダシツ (alang kdasic. いま第1班と呼ぶ)、2、ホーゴ (alang Gungu. いま第2班と呼ぶ)、3、アユ (alang Ayu. いま第3班と呼ぶ)、4、デレケ (alang Deriq. いま第4班と呼ぶ) となる。族人が蜂起する前は計58戸269人、蜂起からさらに集中営 (日本側は収容所と呼ぶ) (訳注3) での虐殺事件 (日本側は第二霧社事件と呼ぶ) 後もなお、幸い14戸39人が残っていた。ホーゴ部落は、日本統治初期に日本人によってホーゴ (Hogo) 社と呼ばれ、それゆえ荷歌 (Hogo) 社と漢訳された。実は、「ホーゴ」—この語は、「Gungu」の音訳である。当時わが先祖は“Gungu”の音を“Gongo”と伸ばして発音し、日本人がホーゴと音訳した。皇民化が推進された時期には、日本人はホーゴ社を桜社 (Sukura 社) と改称し、台湾光復後は「春陽村」と名づけられたが、光復から今日まで族人は依然として Sakura と称している。だから、いま春陽部落に住むタウツァ系統の族人は、故意に春陽村をスヌイン (Snuin 部落)<sup>20</sup>と改めている。筆者は、春陽部落の族人はもっとよく考えるべきだと思う。なぜなら、“Snuin”は、紅い花を咲かせる桜の木を指しているからだ。日本統治下の皇民化期の桜社 (Sakura) という部落名称をまた回復するということなのだろうか。ホーゴ部落の頭目タダオ・ノーカン (Tado Nokan) は、抗日のタロワン血戦 (訳注4) で民族のために生命を捧げたが、彼は生前わがタックダヤ内ではすこぶる人望が篤い部落の頭目の一人であり、いま清流部落に住むタダオ・ナウイ (Tado Nawi. 高信昭氏)、高明華氏たちはその直系の子孫である。

### 二、ロードフ部落 (alang Drodux)

ロードフ部落の主力部落の元の場所は、いまの仁愛国民中学校の現在地と近隣の台地、およびなだらかな斜面地であり、族人はロードフ・ダヤ部落 (alang Drodux-daya. 上部落)<sup>21</sup>と呼んでいる。子部落の跡は、いまの仁愛国民中学校の後ろの山の稜線から霧社の方向に向かうやや下方の山腹に位置し、族人はロードフ・フナツ部落 (alang Droduk-hunac. 下部落)<sup>22</sup>と呼んでいる。蜂起前には計57戸285人であったが、蜂起からさらに収容所での虐殺事件後に残ったのは29戸96人である。ロードフ部落 (alang Drodux) は、早期にホーゴ部落 (alang Gungu) から分かれ、両部落の関係は極めて緊密である。ロードフ部落の頭目バガハ・ポッコハ (Bagah Pukoh)<sup>23</sup>はまた、わがタックダヤの領域では大変よく名前が知られている。姉妹ヶ原事件 (訳注5)、サラマ

オ事件(訳注6)および霧社蜂起などを歴戦して、いずれも無傷で帰還し、タックダヤ部落の指導者の中の伝説的な人物の一人でもある。ある長老は、霧社蜂起で、当時の能高郡守小笠原敬太郎(訳注7)を射殺し、馘首したのは、バガハ・ポッコハ(Bagah Pukoh) 本人だが、その次男ワリス・バガハ(Walis・Bagah)が身代わりになったと考えている。清流に強制移住されて後、ワリス・バガハ(Walis・Bagah)と他の30余名の勇士(烈士)は、日本人に逮捕され、虐待されて埔里郡役所で処刑された。いま清流部落に住む邱長治、邱宏水の二人の兄弟は、バガハ・ポッコハの直系の子孫である。

### 三、スーク部落(alang Suku)

スーク部落は、主力部落のスーク部落(alang Suku)およびシーバオ部落(alang Sipo)、ブクワン部落(alang Bquwan)などの子部落からなっている。ブクワン部落の跡は、いまの雲龍橋(Hako Suku)(訳注8)の春陽部落寄りの橋塔の左上方のなだらかな斜面地に位置する。シーバオ部落(alang Sipo)の元の場所は、ブクワン部落(alang Bquwan)の山稜の頂上の端の平坦地に位置し、いま台湾大学実験林の用地となっている。スーク部落(alang Suku)の跡は、シーバオ部落の左後方のなだらかな斜面地帯に位置し、もし雲龍橋の上から平静部落の方向に面すれば、左岸の絶壁の上方の台地がスーク部落の元の場所であり、いまは茶畑になったり、あるいは他の作物が植えられている。蜂起前は計55戸231人で、蜂起後はわずかに7戸25人となり、スーク部落の人々はこの蜂起の中で最も悲惨な状況にあったことがわかる。スーク部落の頭目ピフ・モーナ(Pihu Mona)<sup>24</sup>が族人のあいだで最も評判がいいのは、敵と対戦する時は、いつも必ず敵の頭目に単独で勝負に挑んだからである。聞くところによると、一度敵の頭目と戦ったとき、左目を刺されたが、最後に敵を破り首級をとった。片目を失っても単独で勝負に挑む信念は最後まで変えなかった。ピフ・モーナ(Pihu Mona)は、わがタックダヤで当時唯一の独眼頭目であった。残念なことに、蜂起の時に、彼はわがタックダヤの他の部落の者に売られ、霧社分室(いまの仁愛分局)で日本人によって処刑されてしまった。いま清流部落に住む梁晚成氏は、ピフ・モーナ(Pihu Mona)の兄弟の孫にあたる。

### 四、ボアルン部落(alang Boarung)

ボアルン部落は、いまの精英村の蘆山部落である。トゥブワン部落(alang Tbuwan)、ルブケン部落(alang Rbuqin)、クドホ部落(alang Qudoh)、クリロ部落(alang Kriro)、およびフナツ部落(alang Hunac)よりなる。トゥブワン部落(alang Tbuwan)は、ボアルン部落の主力部落で、その跡地はいまはもう蘆山部落の公共墓地になっている。ルブケン部落(alang Rbuqin)は、いまの蘆山部落の検査所の右前方の部落である。クドホ部落(alang Qudoh)は、いまの蘆山部落の入口で、公道を挟む両側の部落である。クリロ部落(alang Kriro)の跡は、いまの蘆山部落の族人が眺望台と呼んでいる下方の平らな台地に位置する。フナツ部落(alang Hunac)の跡は、

濁水溪の支流の蘆山段の畔の台地に位置する。ポアルン（蘆山部落）地区は、もともとわがタックダヤ人とタウツァ人の勢力範囲の緩衝地帯であったが、トロック人が大挙して東に移ると、タウツァ人のあいだでまた内紛が起こり、勢力が衰える中で、わがタックダヤがトロック系統の位置に次第に取って変わり、濁水溪上流域での強勢族群となり、ポアルン（蘆山部落）地区は次第にわがタックダヤの領域に編入された。タウツァ系統の族人のあいだで内紛が起こった時、タウツァ人はタウツァ（いま平静）地区よりポアルンを越えて東に移動し、それぞれプラドゥ（Pradu）、ブカサン（Bkasan）<sup>25</sup>に分かれて新しい部落を建てた。そうして、プラドゥ（Pradu）<sup>26</sup>とブカサン（Bkasan）は、わがタックダヤのマヘボ部落（alang Mehebu、いまの蘆山温泉一帯）とわずかに一つの山を隔てて隣り合わせるようになった。数年後、プラドゥとブカサン両部落のタウツァ人は、わがタックダヤの陣営（meyah tuuman gaya ta ita）に加盟した。その後、生活上の実際的な必要から、プラドゥとブカサン部落の族人は、ポアルンの方に移りはじめた。だからポアルン部落は、わがタックダヤに加盟したタウツァ系統の族人によって建てられたのである。抗日蜂起する前は、ポアルンは計48戸192人だったが、蜂起後は、幸いにも18戸54人が残った。ポアルン部落とマヘボ部落（alang Mehebu）<sup>27</sup>は、わがタックダヤの最も内山寄りの辺境の部落に属しており、そのため両部落の関係は最も密接である。ポアルンの頭目タナハ・ラベ（Tanah Rabe）は、いつもマヘボ部落の頭目モーナ・ルーダオ（Mona Rudao）<sup>28</sup>と一緒に行動し、かつて両部落の勇士を率いて襲撃してくる敵をブサワン（Bsawan、いまの能高山南峰付近）で撃退して、わが猟場の全領域を守った。蜂起での戦闘では、タナハ・ラベは、ポアルンの戦士を率いていまのトンバラ一帯に駐留していた日本の警備隊を一掃し、蜂起したわが義士が何の心配もなく霧社地区への全面的な攻撃ができるようにした。いま清流に住む高青山、高清和の両兄弟は、タナハ・ラベの後裔である。

## 五、タロワン部落（alang Truwan）

タロワン部落は、先に述べたタロワンの古い集落である。蜂起前はまだ8戸28人がここに住み続けており、この8戸の人々はほとんど一つの家族である。彼らは、移動してかなり経ってからまたタロワン部落に戻って定住したのである。タロワンの頭目モーナ・ペコ（Mona peko）は、高齢のために長男のテム・モーナ（Temu Mona）がタロワンの頭目を引き継いだ。テム・モーナ（Temu Mona）の年齢は、モーナ・ルーダオの次男バッサオ・モーナ（Baso Mona）<sup>29</sup>とほぼ同じであり、そして、二人が住んでいた部落は隣り合わせで（バッサオ・モーナは、マヘボ部落に住んでいた）、若い頃よりよく知り合った仲で莫逆の友の交わりを結んでいた。蜂起の中で、二人はブトゥツ（Butuc、マヘボ部落の後山）戦役で壮烈な犠牲を遂げた。族人が清流部落に強制移住させられた時、テム・モーナ（Temu Mona）の長女、オビン・テム（Obing Temu）は7歳位で、母のタパス・パワン（Tapas Pawan）が一人で育てた。しかしながら、オビン・テム（Obing Temu）は、結婚後跡継ぎがなく、しかも数年前に病没したため、いま清流部落には、この頭目の家系を継ぐ後裔はいない。

## 六、マヘボ (alang Mehebu)

一般の文献資料や民間の新聞・雑誌では、「Mehebu」を「馬赫坡」と漢訳するが、筆者はわがタックダヤの音により近づけてひとまず「梅黒濃」と漢訳し、誰もがよく知っている「馬赫坡」に代える。マヘボの元の場所は、いまの蘆山温泉区に位置し、いまの警光山荘の後方の台地がマヘボ下部落 (alang Mehebu-hunac)、台地の上方のなだらかな斜面地がマヘボ上部落 (alang Mehebu-daya) である。蜂起前のマヘボ部落は計54戸213人で、蜂起後は幸い22戸63人が残った。マヘボ部落 (alang Mehebu) の頭目モーナ・ルーダオ (Mona Rudao) は、霧社抗日事件の主要な指導者である。長年にわたって外界では霧社事件の指導者についてあれこれ議論されているが、筆者はモーナ・ルーダオ (Mona Rudao) は主要な策動者の一人だと考えている。いまモーナ・ルーダオは反抑圧、反奴隷の民族英雄となっているが、筆者は先祖たちの功罪について中途半端な論述はできず、ましてや霧社抗日事件に触れる族群関係は非常に複雑、敏感で繊細さを要し、その是非については、筆者には容易に論断することができない。モーナ・ルーダオのただ一人生き残った娘マホン・モーナ (Mahung Mona) は亡くなってからもうかなりになる。清流部落に強制移住させられて後、マホン・モーナ (Mahung Mona) は再婚したが、跡継ぎはいない。

上述した通り、1930年10月27日に蜂起した、わがタックダヤの主力部落には、ホーゴ部落 (alang Gungu)、ロードフ部落 (alang Drodux)、スーク部落 (alang Suku)、ボアルン部落 (alang Boarung)、タロワン部落 (alang Truwan)、マヘボ部落 (alang Mehebu) の6部落があった。当時の6部落の人口は約1400人であったが、蜂起による戦役、および収容所での虐殺事件を経て、1931年5月6日に清流部落に強制移住された時には、約102戸298人となっており、そのほとんどは老人、病弱者、婦人、子供で、102戸の中で本来の家族構成を保っていた家は一軒もなかった。強制移住させられた最初の頃は、族人の中には、風土が合わず病気で亡くなる人、故郷や亡くなった身内を思い、あるいは自己の悲惨な境遇への憂憤のあまり自殺する者がいた。そのため日本統治時代の戸籍資料によると、1939年には清流部落は73戸203人に減少したことがはっきりと記録されている。

日本統治前、清流部落の付近の山間部や溪流の畔には、もともとムブガラ (seediq Mbgala) 系統の族人がばらばらと住んでいた。日本人がその土地を占拠して後、全員をいまの仁愛郷新生村の眉原部落 (alang Baala) に強制移住させ、清流部落には樟から樟脳を採取する日本人を住ませた。(訳注9) 族人が強制移住させられた時、日本人をいまの雲林県の北斗、斗南一帯に移住させた。先祖たちが清流部落に定住してのち、日本人はここを「川中島社」と名づけた。当時の行政区分に基づけば「台中州能高郡霧社蕃川中島社」で、台湾光復後は南投県仁愛郷互助村清流社区 (光復初期の行政区分については省略) と改められたが、わが族人たちは清流部落をグルバン部落 (alang Gluban) と呼んでいる。

清流部落は、いままた三つの子部落の名称に分かれて呼ばれている。いまの清流三角公園の分かれ道を基準点として、その正面の前の道路上の傾斜地の用水路を境としてその下方を下部落 (alang Hunac) と呼び、用水路より上の清流派出所が建っている台地を上部落 (alang Daya) とし、分かれ道の角の右前方、排水溝を境としてロードフ部落 (alang Drodux) としている。昔から人が故郷を思う気持ちは誰も同じで、清流のロードフ部落 (alang Drodux) の名称は、わが先祖の元の土地で、いまの仁愛国民中学校のあるロードフ (alang Drodux) の部落名称を踏襲している。当時、先祖たちが日本警察の完全武装の厳戒態勢のもとで、二回に分けて清流部落に着いた時、清流部落は、樟脳を採取していた日本人の家が3軒から5軒あったほかは、まだ未開発の雑木林の荒れ果てた地であった。清流部落が今日のような規模になったのは、先祖たちが苦勞して働き、困難を乗り越えて積み上げてきた成果である。ただ、わたしたちはいまの眉原部落のブガラ (eediq bgala. タイヤル亜族ブガラ系統) (訳注10) の人々に感謝しなければならない。わが先祖たちが清流部落を建設した当初、日本の配給物資に制限があり、そのような状況下で、彼らは適時手を伸ばして、わが祖先たちが必要とする食物や衣服を提供してくれた。祖先たちが植えた、例えば、サツマイモ、サトイモ、高粱などの種や苗は、すべてブガラの人々によって提供されたものである。わが祖先たちの生活がようやく軌道に乗ってから、わがタイヤル族のガヤ (Gaya) を通じてブガラの人々にドゥマフン (Dmahun. 贈り物を贈る)<sup>30</sup>の儀式を行った。筆者は、わが祖先たちが清流部落 (グルバン部落) で苦境の中を再び生きることができたのには、ブガラの人々が危急を救ってくれた恩を忘れてはいけないと考えている。もしわが清流部落 (グルバン部落) にとって、ブガラの人々が命の恩人であることに間違いがなければ、わが清流の子孫は、わが祖先がブガラの人々に対してドゥマフンを行ったガヤを回復し、それによって両部落の先祖たちのセデック／タイヤル (seediq / Tayan) 精神に思いを致し、両部落の子孫の民族交流を発展させていくことが望まれる。

いま清流の族人はなんと幸せであろうか。輔仁大学の簡鴻模教授と、わがタックダヤのトーガン部落 (alang Tongan) の傑出したイワン・ペリン (Iwan Pering) 氏が指導された若い人たちが、私たちのために族譜を書いてくれた。これはわが台湾原住民社会の空前の試みであり、わが口伝の系譜は、これによって初歩的な文書記録ができ、わが民族の文化を振興するうえで、疑いなく大きな助力となり得る。わが清流の族人の特殊な歴史的背景により、族譜の作成は他の原住民部落に比べていっそう困難であった。ここで筆者は特にわが清流の族人に呼びかけたい。わが清流の書面による族譜が精確で無謬であることを追究するのは、その実多くの困難が存在する (実際に事実上の困難が存在している)。従って、本族譜を基礎として、それぞれの家の族人が自ら補っていただければ、いっそう完全な書面による系譜となるであろう。

ここで筆者は、心から感謝の気持ちをもって、私たちのために族譜を書いてくださった輔仁大学のすべてのみなさんに、絶大なる敬意と謝意を述べたいと思います。みなさんのご苦勞とご苦心は、必ずやわが祖霊によって認められるでしょう。

ムフウェ ナム バレ (Mhuwe namu bale)<sup>31</sup>! (みなさんの優しさに心より感謝します)

## 注

- 1 標題の単語の意味は、次の通りである。「Kari」には、「言語、話し言葉、物語、逸事、伝説」の意味がある。しかし、本族には、「歴史」に当たる言葉がなく、それゆえ、筆者は歴史を Kari と仮に訳した。いま私たちの世代の者は、「歴史」という語は、直接日本語の「歴史」で表現する。「Alang」は、部落、土地、伝統領域の意味である。〔詳しくは本文で後述する「訳者付記」参照〕「Nu」は、「私に属する」の意味で、Nu Gluban は nGluban とすべきである。意味は、「Gluban 部落自身に属する」である。ただ、本族語の表記方法は、まだ定まっておらず、それゆえ筆者は暫時 Nu Gluban と表記する。「Gluban」= Guluban。gluban は qluban の訛音であり、qluban は掘り出す、かき出すの意味である。昔、セイダッカは、出草して首を狩った時、いつも「川中島／清流」一帯で、先ず狩った首の脳漿をきれいに洗い流した。「川中島／清流」には、溪流がたくさんあったからである。
- 2 トウグダヤ (Tgdaya あるいは Tugudaya)。
- 3 トロク (Turuku)。
- 4 トダ。
- 5 白狗群。
- 6 Mbgala (Mubugala)、簡称 Bgala (ブガラ)。眉原群、タイヤル語で Baala (バアラ) と呼ぶ。
- 7 Pulunawan。萬大群。
- 8 プス・クフニ。
- 9 Bununun。
- 10 トウルワン。
- 11 シボ。
- 12 Pcahu の意味は、「毒を流す」である。
- 13 トガン。
- 14 バラン。
- 15 ドウロドゥフ。
- 16 ググ。他の文献では、「グング」とも表記する。
- 17 スク。
- 18 メヘブ。
- 19 カツォク。
- 20 トダ (タウツァ) 語。セイダッカは snegin (スネギン) で、赤い花が咲く桜の木、白い花が咲く霧社桜は、bgeyac (ブゲヤツ) と呼ぶ。
- 21 Daya は、上方の意味である。
- 22 Hunac は、下方の意味である。
- 23 バガハ・ポコホ。
- 24 ピフ・モナ。
- 25 Bukasan。
- 26 Puradu。パラドゥとブカサンは、霧社事件が起こる前にポアルン社に編入された。
- 27 メヘブ部落。
- 28 モナ・ルド。
- 29 バソ・モナ。
- 30 Dmahun (Dumahun) ドウマフン / mddahun (mududahun) ムドダフン。Dmahun あるいは mddahun は、セイダッカのガヤの範疇に属し、「感謝あるいは謝罪する」の意味がある。
- 31 「Mhuwe」は「親切」、「namu」は「あなたたちの (あなたたちのおよびあなたたちが、の両方の意味があるが、ここでは後者、あなたたちがの意)」、「bale」は「とても、本当に、本当、本もの」の意味である。

## 【訳注】

- 1 セデックは、セイダッカとも表記される。タックダヤは、日本統治時代は霧社蕃と呼んだ。従来タイヤル族と認められてきたセデックは、2008年4月に14番目の原住民族として認定された。
- 2 事件後、6部落の土地は次の通り処理された。マヘボ社の土地は、トロック群に与えられる。タロワン社は、トロック群に与えられ耕地となる。ポアルン社は、トロック群に与えられ、富士社と改名する。スーク社は、トロック群に与えられ耕地となる。ホーゴ社、タウツァ群に与えられ桜社と改名する。ロードフ社は、タウツァ群に与えられ耕地となる。(『抗日霧社事件をめぐる人々』所収「付録2 〔霧社事件〕抗日六部落地名対照表」の「備考」282頁参照)。  
 付言すれば、タウツァ群に与えられたホーゴ社跡の桜社、およびロードフ社跡の耕地は、1943年に撮影された映画「サヨンの鐘」のロケ地となった。  
 なお、日本統治時代の呼称である「蕃」は、現在の台湾における表記では「群」と書き表わされている。本訳稿においても、この表記を使用した。  
 〔例〕トロック蕃⇒トロック群
- 3 原文は「集中營」であるが、訳文では、以下、日本統治時代の呼称の「収容所」とする。
- 4 1930年10月31日、「抗日部族は頑強に抵抗し、ホーゴ社頭目タダオ・ノーカーは、ホーゴ・ロードフ連合隊を指揮して、タロワン社南方で日本軍警部隊を攻撃する。日本側は苦戦をしいられて、甚大な被害を出す(「松井高地」の役)。日本軍から機関銃を奪い、ロードフ社付近で戦闘をおこなう。のちに、マヘボ社、マヘボ渓谷とタロワン社南方付近に退き、マヘボ大岩窟に戦略物資と食糧を大量にたくわえる。」11月1日、「ホーゴ社頭目のタダオ・ノーカーが戦死する」(鄧相揚著・下村作次郎／魚住悦子共訳『抗日霧社事件の歴史』日本機関紙出版センター、2000年6月、104～105頁参照)
- 5 1903年10月5日「姉妹ヶ原事件」。  
 「霧社群は長年にわたって日本軍に封鎖されたことから物資が不足し、緊急に物資の補充をしなければならなくなった。日本人はこの機会をとらえ、ブヌン族カンタバン社(現仁愛郷萬豊村)に示唆して、両部族の境界で物資交換をおこなうことを霧社群にもちかけさせた。ブヌン族は霧社群の人々を酔わせたのち、夜陰に乗じて攻撃を開始し、その場にいた霧社群の壮丁、百三十余人(一説には百人)のうち八十余人を殺害した。生き残った者の多くも、途中、傷が重かったり水に溺れたりしたため死亡し、部落に逃げ帰ったものは、わずかに六、七人であった。」(鄧相揚著・魚住悦子訳『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』日本機関紙出版センター、2000年8月、151～152頁参照)
- 6 1920年9月18日「サラマオ抗日事件」。  
 「(合流点分遣所と捫ヶ岡駐在所が襲撃される)日本人警察官とその家族がサラマオ群のタイヤル族に攻撃され、二二人が殺害され、そのうち九人が馘首され、七人が負傷し、一人が行方不明となった。このしらせを聞いて、マレツパ警戒所に勤務する下山治平警部補は原住民三〇人を率い、白狗駐在所の佐塚愛祐警部補は原住民一六人を率いて、支援に赴いた。」こうして開始された「討伐」行動は、「日本人警察官のほかに、霧社、タウツァ、トロック、白狗、マレツパ、萬大などの群も煽動されて参加し」、11月18日に「霧社群の一二五人が出勤して、二五の首を狩ったのち霧社に凱旋した。」(前掲『植民地台湾の原住民と日本人警察官の家族たち』163～164頁参照)
- 7 前掲書『抗日霧社事件の歴史』(50～51頁)には、次のようである。  
 「運動場から逃げだした能高郡守小笠原敬太郎は、眉溪の方向に逃げたが、抗日勇士があとを追い、霧社と眉溪のあいだの名もない橋(のちこの橋は、日本人によって郡守橋と名づけられた)のそばで殺害された。いっしょに逃げた菊川郡視学は、抗日勇士の追撃から逃れ、ほうほうの体で眉溪駐在所にたどり着くと、すぐに電話で能高郡役所に救援を求めたのである。」
- 8 日本統治時代には、ここにスーク鉄線橋があった。
- 9 日本側の資料によると、6部落の人々が強制移住させられた時には、川中島には漢人が住んでおり、それらの漢人は雲林県に移住させられたとある。(『抗日霧社事件の歴史』前掲、188～189頁)参照。
- 10 本文前出の「ムブガラ」を指す。脚注6には、「Mbgala (Mubugala)、简称 Bgala (ブガラ)。眉原群、タイヤル語で Baala (バアラ) と呼ぶ」とある。

## 【訳者付記】

【凡例】に述べた通り、訳者は不明な点を著者に逐一お尋ねした。ご教示いただいたコメントは、いずれも脚注に反映したが、以下の3点については詳細なコメントが寄せられたので、以下に訳出して掲げる。

### 【セデック語の表音方法】

Qnahaqun について。セデックの記音方式は、できるだけ字尾二つの母音を残し、字尾から数えて3、4、5番目の母音は省略する。例えば、Qnahaqun という語なら、もとは Qunahaqun であるが、4番目の母音「u」を省略して、Qnahaqun と書く。但し、もしセデックの表音規則をよく知っているなら、当然 Qhaqun と書く。日本統治時代は「白狗蕃／ハカル」に属した。

### 【Alang とはなにか】

一、本族人は、部落を **alang** と呼ぶ。但し、**alang** には故郷、地区、国家などの意味があり、しかも **alang** は決して単一の部落だけを指しているわけではない。一つの部落には常にまたいくつかの子部落があり、これらの子部落もまた **alang** と呼ぶ。筆者が住む清流部落を例にあげてみよう。清流部落は、行政上はいま南投県仁愛郷互助村に属している。日本統治時代は、「台中州能高郡霧社蕃川中島社」で、「霧社事件」の遺族が強制移住させられた地であり、本族人は **alang Gluban** と呼んでいる。**Alang** は部落、**Gluban** は地名である。そうして、**alang Gluban** には **alang Daya** (上部落)、**alang Hunac** (下部落)、および **alang Drodux** (ロードフ部落) の三つの子部落がある。普通、清流部落の族人が外部に自分の部落を紹介する時には、**alang Gluban** と答えるが、もし相手が **Gluban** 部落のことをよく知っているなら、自分が住んでいる子部落の名称で答えるだろう。従って、**alang Gluban** は部落の名称であり、また地区の名称でもある。二、部落時期には、どの部落にも頭目 (**qbsuran bale**) がいて、その子部落には副頭目 (**qbsuran tikuh**) がいた。同じ大きな区域に分布するいくつかの部落、あるいは数十の部落には一人の総頭目が推薦された。平時は、各部落はほとんど完全な自治で、すべては各部落の頭目によって治められていた。次のような問題が発生したり、問題に遭遇した場合は、総頭目を中心に、部落の頭目が補佐して協同で問題の処理に当たった。

1. 部落間にもめ事が起こった場合
  2. どこかの部落で自然災害が起こった場合
  3. 族人あるいはどこかの部落が他の民族から攻撃を受けた場合
  4. 他の民族と盟約を結ぶ場合
  5. 他の民族と伝統領域や境界線などを確認し合う場合
- などである。

### 【alang Mehebu の由来】(訳注\*)

メヘブ部落には自然が作りだした特色がある。いつも早朝や夕刻になると、谷間にあるメヘブ部落は、全体がどんよりした霧におおわれる。その中にいると、小さな水滴がしきりに空から降ってくるのに気づき、まるで空から雨が降ってくるような錯覚に襲われる。これは温泉の熱い蒸気が水面から絶えず吹き出て、ゆっくりと上空に上り、冷たい空気につつかると固まって小さな水玉になる、凝結した小さな水玉の重さが空気の重さを超えたときに、雨滴を作るようにして散らばって落ちてきて、雨が降ってきたと錯覚するのである。本族の言葉では、**mehebuy** には「漏水、空から滴る小さな雨滴」の意味があり、族人はここに部落を建ててのち、「**alang Mehebuy**」と呼んだが、意味は漏水する部落(空から水が漏れる)ということである。但し、族人は「漏水する部落」という名前は適切でないと感じ、**Mehebuy** の訛音から **Mehebu** とし、その後メヘブの部落名称としたのである。

(訳注\*)

この項目については、「本族人は、**Mehebu** メヘブを **Mahebo** マヘボと呼ぶことはない。」との著者のコメントがついている。本文では、「マヘボ」と表記したが、この項目では「メヘブ」とした。

---

**[参考文献]**

本稿の翻訳にあたっては、特に次の文献を参照した。

鄧相揚著・魚住悦子訳『抗日霧社事件をめぐる人々』（日本機関紙出版センター、2001年11月）

鄧相揚著・魚住悦子訳「日本統治時代の霧社群（タックダヤ）の部落の変遷」（『天理台湾学報』第17号、2008年6月）

**[著者略歴]**

『清流部落生命史』（〔凡例〕参照）には、郭明正氏および母、郭温月桃氏の口述歴史が収録されている。次の通りである。

Robo walis・郭温月桃口述・2002/07 (p. 401)、同 (p. 402)、同 (p. 403)

Dakis Pawan・郭明正口述・2002/07 (p. 404)、同 (p. 405)、同 (p. 406)

それによると、Dakis Pawan・郭明正氏は、父、Pawan Dakis・郭良治（日本名・吉丸良治。1919年-1995年）と Robo walis・郭温月桃（1934年-）のあいだに、4人兄弟の長男として1954年に清流で生まれた。祖父は、Dakis Duya・郭金福（吉丸太郎。1907年-1985年）であり、マヘボの出身で霧社事件にも参加したとある。郭氏は、1978年に台湾師範大学を卒業し、埔里工業高校に赴任した。その後ずっと該校に勤めて退職し、現在に至っている。